
デッドタイム・エンペラー（時間が停止した世界でのサバイバルもの）

やった

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デッドタイム・エンペラー（時間が停止した世界でのサバイバルもの）

【Nコード】

N8939Z

【作者名】

やった

【あらすじ】

時間が停止した世界でのサバイバルもの

二人の男が距離を取りながら、都会の暗くて狭い路地裏にて睨みあっている。

「くっ……そがあ……葛西、葛西葛西葛西葛西葛西ッ！　いつもてめえだッ！　クソがッ！　てめえさえいなけりゃあ、この俺が不老不死に……ッ！」

一人目の男。鮮血に染まった衣服からは血が止め処なく溢れており、元より歪んでいた醜い顔が、真つ青になることでさらに酷さを増していた。

名を榛原はいはらじょうじ二と言う。

榛原は出口のない袋小路に追い詰められており、刀身が見事に折られた血染めの刀を、震わせながら構えるのみだった。

「終点だな、榛原よ。ブラッディ・レインのリーダーらしく、せめて貴様の血の雨で飾ってやろう」

もう一人の男が、低い声で終局を告げる。三十代前後で、引き締まった筋肉の上から黒の防弾チョッキを着用していた。

白髪交じりの短髪はオールバックで、鋭い目つきは王の貴祿を感じさせる。

男の名は葛西小五郎。

“限りなく不老不死に近い男”であった。

「……くっ、はははははっ！ いいだろう……俺の負けだ。今回は諦めてやる……だが、ブラッディ・レインは消えねえ！ 消させねえっ！ 逃れた真壁が必ず貴様ヲツ……………ツ」

「喋るな榛原。小物に見えるぞ……台無しだ」

血だらけの榛原の頭部が、不意に裂かれて宙を舞った。

刀ではない。刃物ですらない。葛西の“ただの手刀”が、肉を両断したのである。

現実離れた殺し合いの中であって、葛西は全くと言って良いほどに呼吸を乱さない。

最強。

葛西小五郎を形容するのに、その言葉以上に相応しいものはない。

世界チャンピオンのプロボクサーより、金メダリストの柔道選手より、裏世界で名を轟かせる著名な殺し屋より、何より。

葛西小五郎は、強かった。

アクセルターン

「さて……加速期間も終了か。零志郎は上手くやっているかどうか……………」

葛西は踵を返し、来た道に戻っていく。外は、不気味なほどに薄暗いのだった。

双子の兄妹。深夜の路上、街頭の下で、興奮気味に古びた本のページをめくっていく二人の関係はそれだった。

「へええーい！ 希ちゃん！ 魔方陣だってよ！ 不老不死だってよ！ こいつは僕らのブラッドがカーニバルしちゃうとは思われないかい!？」

中学生くらいの見た目である双子の兄、福地元氣ふくちのぞみは本のページを指差しながら楽しそうに声を張り上げる。天然パーマの金髪はワックスで気が狂ったように立ち上げられており、アフロに近いその髪は、まるで何かの実験に失敗したかのようなだった。

「血祭りのだな!」

同じく中学生程度の容姿をした双子の妹、福地希ふくちのぞみはびよこんと跳ねながら腕をオーバーに振った。短めに整えられた金髪は、兄とは正反対な程に大人しく寝ており、しかし天然パーマだった。

「ちゃうわ！ 血が騒ぐって意味で言ったんだよ僕は！ 血祭りとかこえーよ!」

「ホラーだな!」

「ホラーじゃねえよアホくず!」

満面の笑みで返答する妹に対し、兄もあくまで笑顔で罵声を浴びせる。互いに顔が近かった。

「で……おいおい、希！ チョークだ！ 四時四十四分までにチョコが必要だぞこれ、チョコクッてどこで売ってるかな！？ えつと、えつと、えつと！」

「スプーンと一緒に売ってるな！」

「それはフオオオオックだろうがよアホくず！」

ビシッと鋭く漫才師のようにツッコミを入れる兄。やはり奇妙なほどに笑顔である。

「じゃあ、学校だな！」

「学校か……売ってるか？ いや、いや、パクろっぜ！ いつものようにスプリング・ビューティフルにさ！」

「もうすぐ春ですね的だな！」

「ちやうわ！ バネのように美しくだっつってんだよこのアホくず！」

テンポの悪い二人は、しかし何の前触れもなく同時にスキップをしながら移動を始める。

その先には、深夜の学校があった。

「希ーっ！ 不老不死になったらどうすっかな！ 何か良いことあつかな!?」

「熱湯コマーシャルで、ギネス更新だな！」

「くあーっ！ 冴えてる！ 僕の妹冴えてるっ！」

双子は腕を組みながらくると回り、挙句の果てに歌まで歌いだす始末だった。

暗闇の中、追いつ追われつを繰り返す男女の姿があった。

「はあ……はあ……ふええ、や、やめてくださいよう……っ！」

高校生くらいの少女はおっとりした雰囲気を感じつつ、薄い茶色をしたセミロングヘアを必要以上に風に揺らす。一見足の遅そうな少女がこれまで追っ手から逃げてこれたのは、一言で言うなら“ただの幸運”だった。

あまゐり
天江呼頃。

あまりにも胸が大きいせいか、彼女はしょっちゅうストーカー被害に合っている。

「ああー、ああー、いいよいいよいいよいいよ最高だねえこのスリル、興奮、背徳、ああー、早くお前でこの俺様の腐った欲情と腐った息子をまるっと丸々ファックで満たしてえーっ！」

一方、そんな少女を追いかける男は、早口かつ一息で言い切った。せつかな性格をした強姦魔兼ストーカー、新堂行橋しんどうゆきはしである。

パンクなモヒカンヘアは目を覆いたくなる程原色に近いピンク色で、下唇にリング状の二連ピアスをハメていた。

目の焦点は合っておらず、口からは唾とも涎ともとれる液体が、不必要に零れ落ちる。

「もういやあああつ！ ゆるしてくださいよう！ ふええ……」

「おいおいおいおいおいおいおいおいおい、まだ何もしてねえよ、したと言えば自宅調べたりでも実家だったけど、バイト先忍び込んで靴なめまわしてみたりあれはサイコーだったな、あとは今もう我慢できなくて追いかけていますけどねえーっ！」

新堂は口元を醜く歪ませながら、徐々に距離を詰めていく。時刻は朝の四時を回っており、辺りには誰もいなかった。

おまけにこの辺りは東京にしては田舎で駅も遠く、ひとけのある場所なんて精々コンビ二程度。

少女はただひたすらに、人っ子一人通らない裏道を抜けていく。

「へるぷうう……！」

どつにも緊張感のない叫びなのだった。

とある廃ビルの屋上。チョークで引かれた巨大な五芒星の上で、静かに正座をする女がいた。

「……」

膝の上では、古びた本が一冊開かれていた。女は黙したまま、しかし真剣な表情で本のページをめくっては戻すを繰り返している。

やや湿気を含んだストレートな黒髪は、首周り程度までの長さだった。毛先は競うようにして内側を向いており、タートルネックの黒色セーターと相まってクールな印象を周りに与える。

目は切れ長かつまぶたは二重で、まつ毛も一般女性と比べれば長く、鼻は高く色白。その整った顔立ち　十代後半の美女を並べても、決して引けを取らない程に美しかった。

みずおかみずの
水岡瑞乃、二十二歳。

「……寒っ……」

現在気温は〇度に近い。にも関わらず、水岡は「地肌の上から直にセーターを着るのみ」という有り得ないファッションをしていた。

彼女はブラウスやシャツどころか、ブラすら身につけていない。更に言えば、パンツもはいていなかった。何故だか直にジーパンをはいているのである。

当然の如く、肩を震わす水岡。ずるずると鼻をすするその様子が、せつかくの外見を台無しにしていた。

「線……合ってるかな……合つてるといいな……寒い……」

水岡は、本に記された魔法陣と、屋上に引かれた白線を懸命に見比べる。

何度も確認した後、よし、と拳を握りながら頷いた。冬場の白いため息をわざとらしく吐きながら、彼女は一瞬腕に巻かれた時計に目をやり、そのまま一人夜空を仰ぐ。

「四時四十四分まで、あと三十分……」

一通り呆けた後、彼女は不意に本を雑に置き、俯きながら両手で自らの身体を覆った。

「……………寒い」

一組のカップルがいた。

眉毛に前髪がかからず、一切襟足がない程に短い黒髪の男性と、白髪に近いホワイトブロンド・ロングヘアが、くるくるとキャバクラ嬢のように巻かれた女性である。

サングラスをしていてヤクザのようにクールな外見の男性と、華やかで煌びやか、パツチリと大きく開かれた目が魅力的な女性。

黒と白、まるで対照的な二人だった。

そんな二人は現在、深夜の往来にて軽い痴話喧嘩の真っ最中であ

る。

「どーこに落としやがった!? ああん? せつかくのハッピーエ
ンドの塊を! あれ手に入れんのにどんだけ苦労したと思ってんだ
よ!? “ネクロノミコン”だぞ!? ネ・ク・ロ・ノ・ミ・コ・
ン! 不老不死の種をみすみすバラ卷いてどうするよっ!?”

サングラスを人差し指でつり上げながら、男 せんごくあかし 仙石灯は、ずい
と前に出た。

「ワタシ、知らないアルよ! ニポンゴ、ワカラナイアルヨ!”

対して、日本語を喋れないフリをする女性 メリル・アンヴィ
ル。

その瞳の色はマリンプル!。彼女は生粋のアメリカ人だった。

「てめえなあ……マジに卸すぞ、いや、犯すぞ」

「黙れ変態。いいじゃないの、写本だし、もう一冊あるんでしょ?
大体、あんたの不老不死化計画っていう、壮大にバカバカしい話
に付き合わされてる身にもなって欲しいわ」

メリルは先刻とは打って変わって流暢な日本語で切り返す。何故
か、上着を脱ぎ出した。

「てめえ……つか、何故脱ぐ」

「え、犯すんでしょ?」

「犯さねえよ！ 時間ねえよ！ いや、そついうことじゃねえ！
話題すり返んな！」

「……バレた？」

「てへっ、みたいにウインクしてんじゃねえ！ ……ったく。まあ、
いい……時間が惜しい。とにかく協力しろよ、メリル」

「もちろん！ 灯の壮大な厨二病計画の、失敗を祈って！」

「……やっぱ犯す」

メリルのアゴを、思い切り下から持ち上げるようにして掴む仙石
だった。

緊迫した状況だった。男が二人、女が一人。

男のうち一人は女のこめかみに銃口を向けて人質としており、も
う一人は構えたサブマシンガンを撃てずに手元を震わせていた。

東京タワーの真下。辺りにはカッブル、家族、警察官などの“死
体の山”が積んである。道路は炎上しており、パトカーなどは無様
にひっくり返って轟々と燃えるのみだった。

そんな非現実的な状況で、人質を取った男は嬉しそうに口元を歪
ませる。

「動くなよお……うーごくーなよー。分かってんだろおー？ 郡山

加速期間中に死んだらどうなっか……なあ？」

その男、栗栖卓也くりすたくやは既に片目と左手首を失っていた。半分ほどが血に塗れた顔面に浮かぶのは狂気のみ。アシンメトリーの赤髪が、だらりと垂れていた。

「零志郎……構いません……！ 私ごと撃つてください……じゃないと彼らは……ブラッディ・レインは……！」

人質の少女、木下美紅きのしたみくは、強気な言葉とは裏腹に身体を震わせていた。

長く黒い、ややウェーブのかかった髪はポニーテールになっている。

衣服は既にボロボロで、身体は痣だらけ。ところどころに焼け焦げた跡がある、その少女。

一方、サブマシンガンを構えた男 こおりやまれいしろう 郡山零志郎は、呼吸を荒げながら言葉を口にした。

「僕はワイルドカードの副長だ……！ けど、けど……！ 妻を見捨てることなんて……出来るわけが……ないだろう……！」

おとなしめの黒髪は真ん中で分けられており、見た目は落ち着きのある高校生だった。しかしその眼は血走っており、鮮血に塗れて赤く染まったダツフルコートからは、鬼気迫る何かを周囲に感じさせる。

「零志郎……バカなことを……！」

「いいぜえー……てめえはそういうキャラだよなあ、郡山！ よー

し、この女は預かるぜ？ 後ろに下がれ……早くしろ！」

同時に口を動かす栗栖と木下。人質を取られた郡山は逆らえず、ただゆっくりと後退していく。

「……手を出すなよ。栗栖……美紅に手を出したら……僕は絶対に貴様を許さない……」

「ああ、約束するぜ」

そうして、何度か銃声が響いた。

零志郎の腹部数箇所を、容赦なく貫く弾丸。にたりと邪悪な笑みを闇夜に映す栗栖。衝撃で後方に弾き飛ばされる郡山。

「うそ……うそ、うそうそうそ、いや、いやよ……零志郎ーッ！」

「バアアアーカめえええっ！ 覚えとけ……正義の味方気取りはいつだって短命だってなあ！ ははははっ！」

最後に。

木下の凄惨な叫び声と、栗栖の勝ち誇った笑い声だけが、死体だらけのその場所に響き渡るのだった。

深夜、コンビニ。レジにて弁当が温まるのをひたすら待っている男がいた。

鴉方うがたそうま総真、十八歳、高校三年生、帰国子女。

黒色の髪は短く自然に立っており、弁当待ちが長すぎるせいか、元より鋭い目つきにさらに磨きがかかっている。

鴉方は今にもレジをぶち壊しそうな勢이었다。

「お待ちどうさまでしたあ」

「おせえんだよ、ここは欧米か！？ いいか、俺はなあ、アメリカが嫌いなんだよ、べらぼうに！」

店員に思い切りガンを垂れる鴉方。数秒ほど無言が続いた後、舌打ちして彼は店を出た。

「ったく……綺麗な夜空だぜ……」

出ですぐに夜空を仰ぎ、急に見た目に似つかわしくなくことを言ひ出す鴉方。

彼は黒色のポケット付き甚平のみを纏っており、どう考えても気温に対する防寒具が不足していたが、しかし寒いの一言すら漏らさない。

ビニール袋を腕に引っさげたまま、ポケットに両手を突っ込み、ガニ股で帰路へ。

鴉方は歩きつつ、空を見上げたままぼそりと一言呟いた。

「元気にしてつか……？ 郡山」

鵜方の表情が急に和らいだ。何かをなつかしむような、儂げな表情。筋肉質な上半身に、まるで似合っていない。

「早く取りに来いっつんだよ……天体望遠鏡が邪魔でしょうがねえ」

鵜方はふう、と白い息を吐いた後、視線を通常に戻した。

通りは、コンビニから少し歩いただけで既に真っ暗である。

と、その時だった。

「へるぷうーっ！」

どうしようもないアニメ声か、漆黒の闇に予想外の角度で切り込んでくる。

「……あ？」

鵜方は怪訝そうな表情で、声が聞こえた方向に目を向けた。

しかし辺りに広がってるのは闇と公園と、針葉樹林のみ。

「私の処女があーっ！ ふええーっ！」

「……あー？」

鵜方は再度声を漏らした。今度は先ほどとはリアクションが違う。鵜方の額が、オーバーにひくひくと動いていた。

彼はすぐさま弁当をその場に投げ捨て、地面を蹴る。声の元に向

かつて全力疾走、歯をむき出しにして風を切った。

「ここは日本だろうが……！ レイプとかざけんなよ……まじで……許さんぞアメリカ被れめ……！」

鵜方総真、十八歳、高校三年生、帰国子女。

“アメリカ的”だと主観で判断した物事に対し、容赦をしない男である。

携帯電話を片手に、ビルの地下、真つ赤なソファ―に腰をかける男がいた。

「ええ……手はず通り、榛原……我らがリーダーは葛西によって殺されました。まあ……所詮はその程度の器だったということでしょうね。んふふふ……」

白目も黒目もほとんど見えない。あまりにも細い三日月目に、わざとらしく不自然につり上がった口元。

まかへしんいち
真壁真一の不気味な笑顔が、暗い部屋の中で唯一の明かりである、携帯電話の液晶画面の光によって照らされていた。

『ソウカ……。カレハ“ウソヲツイタ”ノダ。トウゼンノキケツダナ』

携帯電話より、抑揚のない電子音が流れる。真壁は足先まで伸びたあまりにも長い黒髪を撫でながら、そうですね、と呟いた。

「そういえば、大先生？ 栗栖がお手柄ですよ。なんと、あの郡山をやったそうです。その上戦利品として、木下美紅を絶賛お持ち帰り中だとか……。ワイルドカードのアレコレ、彼女にいろいろ喋らせちゃっていいですか？ んふふふふ……」

『……スバラシイ。ダガ、カンキンシテオケ。テヲダスナ。スクナクトモ、アクセルターンガオワルマデハ……』

「そうですね……？ 私は加速期間だからこそ、利用すべきだと……ま、もう終わっちゃいますけど。でもなあ、もったいないですよ、やはり……いい身体してますし。何より、ああいう幸せぶってる輩って、泣かしたくなるじゃないですか？ ありとあらゆる方法で……んふふふ……」

『フロウフシノ、タメダ。ガマンシロ……マカベ』

「……やだなあ。冗談ですよ、大先生」

真壁はんふふと、不気味な笑い声を漏らす。

彼の周りを彩る、暗闇の中、一面真っ赤に塗られた壁、床、天井、家具。

赤いソファーから、ぼたりぼたりと。

鉄臭い、まるで血液のような何かが、垂れていた。

私立中学校の屋上。金髪天然パーマの漫才双子、福地兄妹は、それぞれが真剣そうな表情のまま、チヨークで白線をコンクリート上に引いていた。

「希っ！ この中学つてば、僕らが今年卒業するところより広いな！ 不老不死になれたら、ここに転校しないか！？」

「その心は……！？」

「特にない……！」

「グツジョブだな、兄！」

双子は互いに笑顔を見合わせ、親指をグツと立てあった。

距離が離れた双子の間には懐中電灯が置かれており、それが風に揺られて少しだけ転がる。

「にしてもさ、この本落としたバカツプル、今頃悔しがってるだろうなあ！」

「地団駄踏んでるな！」

「まあ、落としたっつーか、僕が超絶スリテクニクでエレガントに盗んだんだけどね！」

「泣き声はばおーん、だな！」

「ちゃっわ！ エレファントじゃねええよアホくず！ 駄洒落か！」

「言葉遊び、的だな！」

きゃっきゃと騒ぐ、ハイテンションな双子。

「んなことより、これあつてつかなあ？ 僕はスリ専門だし、ぶっちゃけ絵の才能は……魔法陣なんて描いたこともねえよ！」

魔法陣の左端。自らの引いた白線を凝視しながら、兄はボサボサの爆発頭をぐしゃぐしゃにする。

「吐きそうになるな！」

「見ただけでか！？ そんなにヒドいのか、僕の妹よ！？ つーかお前の方こそどうなんだよ、希！」

魔法陣中央を挟んで逆側、兄は妹の作品に眼を移し、数秒の後、口元をひくひくさせた。

「……うめえじゃねえか」

「神様は不平等……ゴッド・フビョードー的だな！」

「僕の妹センスあるっ！」

希いっつ、などと叫びながら妹のもとに向かって走る兄。がしりと抱き合い、二人はそのままぐるぐると回るように踊った。

「四時四十四分、地上より二十メートル高い場所にチョーク魔法陣を描き、その上でネクロノミコンを開く……完璧だ！ 僕らはもう少して不老不死の熱湯コマージュシャーラーとなるっ！」

「お笑い芸人への第一歩だな！」

とある廃ビルの一室。汚れたベッドの上で横になる高校生くらいの男子、郡山。

彼は最強の男　葛西小五郎によって、この場所まで運ばれていたのだった。

「はぁ……くそ……僕は悔しいです……葛西さん……美紅を守る事が出来ずに……！」

呼吸を荒くし、熱に浮かされる郡山は、その目から僅かに悔し涙を流している。

「……静かにしろ。言葉は人類を総じて小物へと変える。今は耐え時なのだ、零志郎。防弾チョッキのおかげで死を免れることが出来た……今はただ、その奇跡に感謝をすべきだ」

「分かってますよ……でも、だからと言って僕は黙ってられないです……！」

目を閉じたまま椅子に腰掛け、瞑想中の葛西。そんな彼に対し、郡山はその腹の内をぶつけた。

「喋るな、と言った。二度言わす気か？」

「くっ……」

片目だけ開いた葛西から放たれる圧倒的な威圧感。郡山は拳を握り、歯を振るわせることしか出来なかった。

「無事でいてくれ……美紅……っ！」

そんな葛西と郡山の元に、一人の訪問者がやってくる。

「……………」

無言で踏み入るその男。スケッチブックとノートパソコンを不恰好に抱えていた。

ゆたにまさおみ
湯谷雅臣。

いわゆるオタク、やや太った体型に伸び切ったヒゲ。何日か風呂に入っていないためか、ぺたんとなった黒髪が余分に水気を含んでいた。

ファーつきの北国で着るような防寒具を羽織りつつ、赤縁の眼鏡をしている。

湯谷は突然ポケットからマジックを取り出し、サラサラと文字を書き始めた。

『ワイルドカードのメンバー、貴方たち二人を除いてほぼ全滅。ブラッディ・レインのメンバー、隠れていた幹部数人と、その直属の部下を残して、ほぼ全滅』

「……………そうか。感謝する、情報屋」

スケッチブックを見せる湯谷に、葛西は礼を言う。しかしその瞳は、静かな怒りに燃えているようだった。

「ブラッディ……レイン……！」

一方、郡山はわなわなと震える。葛西とは異なり感情を剥き出しにし、血走った眼で天井を仰いでいた。

「許さない……許さないぞ……絶対に……！」

追う新堂と追われる天江。せつかちな強姦魔と不思議系被害者の十数分に渡る壮絶な追いかっかが、ついに終局を迎えていた。

「ふええ……私、食べてもおいしくありません……！」

「食べてうまいかどうかは俺様が決めるさだがしかし断言しようてめえは美味、見た目の美しさ可憐さも然ることながらその胸の豊満さは全国の成人男性を墮落させる、そしてこの俺様の例によらず例外とならず老害となってフォーリンラブ！」

袋小路だった。壁を背にしてぼろぼろと大粒の涙を流す天江に、じりじりと滲みよる変態ストーカー、新堂。

彼は自らの口元にじゅるりと舌を這わせながら、ズボンのベルトを投げ捨て、そのまま片手でパンツを降ろしていった。

新堂擁する大蛇が露になる。獲物を狙うかのようにいきり立って

いた。

「ふえええ……やだよお……」

「へっへっへ……さあ、ファックの時間だ！」

そうして数歩、新堂はついに天江の肩に手をかける。闇が深すぎて互いの顔が見えない状況で、ギンギンの棒を天江のスカートに擦り付ける変態。

しかしあと一歩というところで及ばず、新堂の欲望は満たされることなく阻まれる。

背後より突然新堂の首根っこを掴んだ男 傍若無人な帰国子女、
鵜方によって。

「ファック」っっー単語はなあ、この鵜方が何よりも嫌いな英単語なんだぜ？ そして“レイプ”っっーのは、この鵜方が何よりも嫌う行為だ……ヘドが出る」

「あっ……ぐっ……」

新堂は両手を天江の肩からどけて、首を掴んだ鵜方の手首をむしろうとする。

しかしそうすればするほどに、鵜方の握力が強まるばかりだった。新堂は、およそ人間離れした奇怪な声を漏らし始める。

「ウ、ズ……ウ……アア……ッ」

「……よくみりゃあ、てめえ、ケツ丸出しじゃねえか……絶句だわマジで……」

鵜方は下半身丸出しの新堂にあからさまな嫌悪感を示し、そのまま後方へと投げ捨てた。

「あ、ぐっ、うあぁっ……！」

「ごろごろと無様に転がる変態、新堂。」

天江はそんな男二人の様子を、ただ呆然と見ていた。

「怪我はねえか？ ……おいおい、髪が明るすぎやしねえか。日本人たるもの、大和撫子を彷彿とさせる、しつとりとした黒髪をオススメするぜ。欧米を真似て髪を染める必要なんてねえさ」

暗闇の中、天江の前に立つ甚平姿の鵜方。

「ふえ……見えるですか？ こんなに暗いのに……じゃなかった、あうあう、ありがとうでしたっ！」

感謝より先に疑問を呟いてしまったことに慌てながら、天江は深々とお辞儀を返す。髪の色くだりは完全に無視だった。

「ああ、俺は目と耳がすごぶるいいからな……肉体的に上等なの……ウゲッ!？」

偉そうに鵜方が語り出したと同時に、密かに起き上がっていた新堂による攻撃。

大雑把に投擲されたバタフライナイフが、鵜方の尻に突き刺さったのだった。

「ざまあみろざまみろ、ざまあざまあざまあーっ！」

「てんめえ……」

怒りを露にしながら振り返る鵜方。

「……ひ、ひい……っ」

一方、新堂はそんな鬼神の如き形相をした鵜方を前にして一瞬怯み、尻尾を巻いて逃げ出した。

「はっ……この俺から逃げられると思うなよ……八工野郎」

顔を引きつらせながらも足を前に出す鵜方は、逃げた新堂を追いかける気満々。

そんな鵜方を見た天江は、

「あ、あのっ！ お尻っ！ 大丈夫ですか……私……あの……お尻、弁償しますっ！」

などと意味不明な発言をしながら、再び深々とお辞儀をするのだった。

「……安心しろよ。ほれ」

鵜方は片手で尻に刺さったナイフを引き抜き、もう片方の手で甚

平をまくって見せた。

しかし、辺りは真っ暗である。何も見えるはずがない。

「……………」

「甚平とトランクスには穴が空いたが、ケツは無事だ。硬いからなもういいか？ 俺あ、さつさとアイツ追いかけてぶちのめしたいんだが……………」

「え、あの、でも……………綺麗な尻を……………弁償しないとっ！」

さつさと袋小路を出ようとする鵜方の後を、駆け足で追う天江の姿がそこにあつた。

イラツとした表情を見せながら、鵜方は振り向き、罵声を飛ばす。

「意味が分からねえっつんだよ！」

「ふええ、私も分かりませんようー！」

「……………間に合ったか」

白と黒のカップルが、とあるマンションの屋上にてため息を吐く。そこには白線で、大きな魔法陣が描かれていた。

「絵、うま……………意外と器用なのねえ、灯。感心感心、中学時代はエロイラストでも書きまくってた系？」

「……犯す」

「きゃー、汚されるー、私のピュアな感性がドス黒く塗りつぶされるー」

棒読みで被害者ぶるメリル。そのホワイトブロンドの髪が、風に靡く。

「……少しは黙れ。そろそろ時間だぞ……協力しろ」

一方、ドカツとあぐらをかいて座り込むのは、サングラス男、仙石である。

仙石は古びた本を数ページほどめくった後、不意にパタンと閉じてそつと下に置いた。

「俺が不老不死になるにゃあ、てめえの力が必要なんだ、メリル」

「イエス、マイマスター。で、どうするのよ。身体を差し出せばいいのかしら？」

「てめえの頭の中にはエロしかねえのか!？」

声を張り上げる仙石。メリルは口元を手で押さえ、くっくと笑っている。

「……失礼、ジョークよ、アメリカンジョーク。信じてるわ、灯。

“停止世界は存在する”。けど……救世なんて壮大なこと、私に手伝えるのかしらねえ……」

「時間だけなら無限にあるさ。これから俺たちが足を踏み入れるのはそついう場所だ」

「パチ情報だったら笑いすぎて息が止まるかも、私」

「いや、事実だ。“東京神隠し”。全てはその異常性が物語っている……」

「いちいち厨二っぽい言い方しないで」

「あー、あー、毎度毎度懲りずにうるせえアマだ！　だが愛しているぞー！」

仙石はぎろりとメリルを睨みつけながら、声を大にした。対してメリルは微笑みながら、私もよ、と小さく呟き返す。

「この俺、仙石灯は不老不死となって世界を救う……為すべきは正義。世の救済！」

「分かった分かった……だったら私は、愚かな純情青年の行く末を見守るとしましょうか、ね」

時刻は既に四時三十七分。始まりと終わりが、同時に近付いていた。

悪趣味な血染めの部屋の中。真っ赤なソファーに腰掛けながら、だらりと長い髪を垂らした細目の男と、そんな男の前で怒り狂う隻

眼の赤髪男。

ブラッディ・レインのメンバー、真壁と栗栖がそこにいた。

「納得いかねえなあ……副リーダーさんよお。俺は譲二さんに憧れてここにいたんだ。譲二さんが死んだ、だ？ てめえさんが新リーダーだあ？ ざっけんな！ 願い下げだぜ……そんな組織ッ！」

血走った片眼で真壁を睨みつける赤髪の栗栖。しかし真壁は動かない。

「やれやれ……郡山零志郎を射殺し、木下美紅をさらった……その功績を評価し、君をナンバースリーに置こうとしているんですよ。そのその一体何が不服なんですか？」

「“表情”だッ！ てめえのな！ ……千年経っても表情と感情を忘れるな……それが譲二さんの教えだった……！ けどてめえには表情がねえ……不気味な程に！」

だん、と真つ赤な机に拳を叩きつける栗栖。その奥では、縛られたままクロホルムで眠らされている、木下美紅の姿があった。

「んふふふ……面白いこと言いますね。そういう君こそ、譲二さん譲二さんって、彼の言動や口調を真似てるだけのように見えますけど？ それが君の本当の表情ですか？ 感情なんですか……？」

「てめえ……真壁え……」

「“リーダー”です、栗栖くん」

につこりと不気味に微笑む真壁を前にして、栗栖は拳を振るわせるのみだった。

「そう、君では私には敵わない。君は確か悪に憧れ、榛原さんに憧れ、この組織にやってきたはずです。ですが安心してください……私も悪です。“君以上に”、ね」

「るせえよ……俺が憧れた闇は、てめえみたいな陰湿なもんじゃねえ！ スカツと豪快に偽善者を地獄へ叩き落す！ 力の最終形ッ！ それが譲二さんだった……葛西の野郎に唯一張り合える男だった……！」

「しかし、死にました。それが結末です。加速期間中は不老不死ではないのです……現実を見なさい。生き残ったのは、この私だ」

「てめえ……」

息を荒げる栗栖。そんな彼を真壁はさらに追い詰めていく。

「大体、組織を抜けてどうするつもりですか？ 榛原さんを殺した葛西に、延々と挑み続ける気ですか……？ 組織を敵に回しながら？ 武器も回してあげられませんよ？」

「……くっ」

「私についてくれば、君にアジトと武器と部下を差し上げます。君の戦闘センスには光るものがある……思うに、葛西を殺しうる人間がいるとすれば、それは君です」

真壁は笑顔を崩さずに栗栖を見つめる。そうして、続けた。

「んふふふ……どうですか？ 君の任務は単純明快に、“次の加速期間で葛西を殺すこと”。……私が力を与え、君が武力を行使する……別に私を敬う必要はないんですよ。戦う理由は榛原さんの仇討ち。しかしそれには力が必須……だから君は私を頼る。それでいいではありませんか？」

真壁の提案。栗栖は齒軋りをしながら真壁に怒りの視線を投げるが、ほどなくして舌打ちをした。

「……いいだろう。葛西は俺が殺す」

栗栖は踵を返し、木下を置いて、血染めの部屋を後にするのだった。

ノーブラ主義者、寒がりの水岡は、未だ屋上で一人凍えかけていた。

「ふっ……死にたい……ふっ」

手はかじかみ、齒はガタガタと小刻みに動き、しかしそんな中で彼女は現在腹筋の真っ最中である。

身体を動かせば少しは温まるのでは、という安易な考えに基づく行動だった。

「……早く到着しすぎた……ふっ……でも、そろそろ……」

口を動かしつつ、身体も動かす水岡。相変わらず鼻がずると鳴っている。

彼女は腕時計に目をやった。短針は四、長針は三十九を指している。

四時四十四分まで、あと僅かだった。

雑に開かれたまま、魔法陣の上に置かれた魔道書、ネクロノミコンの写本。

水岡は腹筋を止めて、そのネクロノミコン写本の端を片手で掴んだ。

そんな時である。バンという金属的な反響音が響いたのは。

「はあ……はあ……ああ？ 誰だ……そこにいんのは誰だ……？」

それはピンク色のモヒカン頭 新堂行橋が、屋上に出るために扉を開け放った音だった。

「そこまでだぜ八工野郎！」

「待って、ちょっと待ってよう……速いよう……」

さらに次の瞬間、高校生くらいの二人組が、モヒカン男に続いて飛び出してくる。

鵜方に天江だった。新堂を追ってここまでやって来た、というわけである。

「あなたたち……？」

「そこまでなのはてめえだ、センスバツの甚平男！ よおーくみやがれ、人質だ！ この見知らぬ誰かが、死んでもいいのか！？ よくないっしょ、今の俺はプッチンパツンキレちまつてるぜー何するかわかんないぜえー、オラ分かったらさっさと退けよ、退けつつてんだ腐れ和服！」

新堂は状況を把握できない水岡の背後に素早く回り込み、持っていたガラスの破片を彼女に突きつけながら言い放った。

その行動、あるいはその人質を前にして、目がいい鵜方の動きがぴたりと止まる。

ややあって、状況をまるで無視した単語が鵜方の口から飛び出した。

「やべえな……あのお姉さん……ドストライクだどうしよう……」

ごくりと固唾を呑む鵜方。一方天江は状況がよく分かっておらず、首を傾げるばかりである。

「待って……ここから離れて……ここにいたら危険……あなたたち、巻き込まれる……早く……あと三分しかない……寒い……不老不死の世界に巻き込まれる……早くここから去って……あなたも……」

対して、人質に取られ、かじかみながらも、緊迫した様子で水岡は言う。そんな彼女の様子を見て、新堂は一言、

「……ラリってんのか？ 俺と一緒にじゃん」

と、笑顔になった。

「おい、ハエ。その人を離しやがれ！」

そんな中、鵜方が低い声で唸りながら前進していく。一步、二歩、三歩。魔法陣の中に侵入し、動くなと叫ぶ新堂を無視して歩み続けた。

「ま、まって、暗い、怖い……」

天江も鵜方に続いて駆け足で寄っていく。四人は魔法陣の中、対峙していた。

「止まれ！ ブツ刺すぞつつつてんだよ！ ああああああ！」

「……」

キレ始める新堂。さすがにこれ以上はやばいと考えたのか、叫ぶ新堂に従って鵜方は歩くのを止める。

膠着する状況。時間だけが、ゆっくりと過ぎていった。

「はあ……すいません……あの……もう無理そうなので先に謝っておきます……ごめんなさい……」

そんな中、静寂を破って白いため息を吐くのは水岡だった。諦めたように目を瞑り、謝罪の言葉を述べ始める。

「諦めるな！ あんたは俺が助ける！」

一方、状況を勘違いし、余分にカッコつけた言葉を吐くのは鵜方だった。

「早く退けつつつてんだよ……！」

対し、早口で捲くし立てる余裕すらなくした、未だ下半身を露出したままの変態、新堂。

「ふええ……」

そもそも何でこの場にいるのか、いまいち自分でも分かっていない天然娘の天江。

「 始まります」

時刻は四時四十四分。

デッドタイム

“ 停止世界 ” への移行が、始まった。

渋谷、スクランブル交差点。ほとんど人通りがない時間帯、交差点の真ん中から渋谷駅を見つめる一人の少女がいた。

小学生くらいの身長と顔つき。染色とは思えない鮮やかな水色の髪が腰の辺りまで伸びており、瞳の色は琥珀。

幼い骨格とは裏腹に、その表情からは達観した様子が読み取れる。終電がなくなつて数時間、そんな時間でありながら、少女はジャージを着用、真つ赤なランドセルを背負っていた。

どう考えても目立つその風貌。しかしながら、往来を進む酔っ払いたちはまるで彼女に気付かない。

“少女はそこに在りながら、そこに在つてはならない存在だった”。

アクセルターン

「……加速期間終了、今回も救世主に値する者はおらず……か。さて……新たな救世主候補たちよ。歓迎しようぞ」

表情を変えずに、少女は両手を広げた。

するとその刹那、スクランブル交差点が光に覆われる。赤と白のグラデーションが不自然に揺らめいた。

まるで時間を歪めたかのような、空間を裂いたかのような、二次元的、あるいは四次元的な違和感が、渋谷を包み込んでいく。

「……………!?!?」

少女に誘われるようにして、その場へ浮かび上がった男女のシルエット。

人数にして八名。それが今回の“新たな参加者たち”なのだった。

「ふむ……多いのう、今回は……面白い」

少女はにたりと笑った。発光が薄れ、膨張していた空間が元のサイズに収縮する。

「ワシの名は字頭^{あざな}。ようきたのう、ネクロノミコンの使徒たちよ…
…これより、救世の試練を開始しよう」

現れた八人の顔を眺めながら、彼女は最後にただ一言、こう言った。

デッドタイム

「停止世界へようこそ 不老不死の諸君」

時刻は四時四十四分だった。突如として渋谷に飛ばされた八名の反応は様々である。

「うはーっ！ 瞬間移動！？ 早速一発芸入手か！ やっべー、きたこれきたこれ！ って不老不死関係ねえ！」

「ノリツツコミ的だな！」

「げ、てかあのバカップル……やばい、僕が本をパクった相手じゃん！」

「因果応報的だな！」

状況に戸惑うどころか、楽しむ余裕さえ見せる福地兄妹。

「な……言つたろう？ 不老不死とは事実、存在する！ 今この瞬間より、俺らは不老不死としての力の片鱗を……って、多いなオイ」
「えー、なにこれ、変な感じ。存在を強く感じる……なるほど。不老不死同士は惹かれ合うつてヤツかしら？ ベタベタね。っていうか……一人下半身丸出しの変態がいるんだけど？」

周囲を見回しながらも、落ち着いた様子の仙石カップル。

「……ああ！？ なんだこれ！？」

「ふええ……！？ あ、あれ、私たち……さっきまで屋上に……あれれれ！？」

「おいおいおいおいおい……どういうこつた……なんじゃこれ……てめえの仕業か……！？」

「だから言つたのに……離れてって……言つたのに……ああ、寒い……」

諦めたようにため息を吐く水岡に、何が起きたのかさっぱり理解が出来ていない鵜方、天江、新堂の三名。

既にそこに字頭の姿はない。

「ああーっ！ この子！ このアフロ頭の子！ さっきどこかで見かけた……！ もしかして、貴方たち、そのネクロノミン……」

「ぎっくう！ ちちち違いますよ、違うよな？ 希！ こいつはその……偶然！」

「偶然、兄が盗んだんだな！」

「アツホくずううう！」

メリルからの指摘に、早くも騒ぎ立てる福地兄妹。

「くっ……渋谷か、ここは……？ や、やべえ、ズボンがねえ……警察が近え……あー、くそくそくそくそくそくそくそくそくそくそお！ どうにでもなれ！」

「あ、てめっ……おい！ 待ちやがれ！ あ、でも……大丈夫か、あんた！？」

人質にした水岡を置いて一目散に逃げ出す、下半身露出男の新堂。

鵜方は追いかけてやろうとしたが、すぐに思い直って動きを停止。先に水岡の安否を確認する。

「……大丈夫、怪我はないから。でも……ごめんなさい……いろいろ説明、しないと……」

「説明？ おい、もしかして今の瞬間移動、あんたの必殺技か何か？ だ……だとしたらすげえよオイ！ さてはあんた、忍者か！？ 俺、忍者は好きなんだ……！」

状況を説明しようとする水岡にかぶせるようにして、鵜方が突然目を輝かせた。

帰国子女のイメージをぶち壊す、中々の頭の悪さである。

「はうつ……ふええ……ここ、渋谷？ 渋谷とか来たことないよう
……おうち、帰れるかな……お、お母さんに電話しないと」

もう一人、鵜方とは違った方向に頭が悪い少女、天江。

そんな二人の様子に啞然とする水岡と、福地兄妹に絡んでいくメリルに頭を悩ませる仙石が、同時にため息を漏らした。

「……………不安かも」

「……………不安だぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8939z/>

デッドタイム・エンペラー（時間が停止した世界でのサバイバルもの）

2011年12月28日01時56分発行